

院外茶話

vol.160 令和2年10月1日

科学が明かす

色即是空

科学がおよばぬ

空即是色

色即是空 現代版



雪の九品仏

静かな口調で語る老紳士の言葉遣いはとても上品だった。ときおり仏教の話をするので、我が家の近くにある九品仏浄真寺を紹介したところ、そのお寺は知らないと言った。

春には桜、次いで紅葉が赤く染まって、黄色の銀杏、冬は雪景色が素晴らしいので、是非にと勧めた。

九品仏の三仏堂にはそれぞれ三躰の阿弥陀如来が安置されて、よせばいいのにこの阿弥陀様の説明までしてしまった。聞きかじっただけの、観無量寿経に書いてあると言いながら。

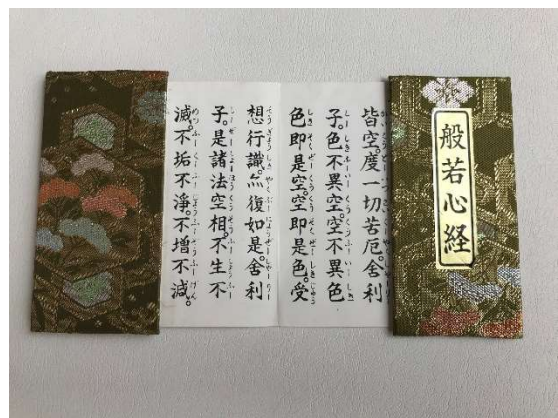
その方は感心した風に私の話を聞いて、最後にお名刺を下さいと言った。言われるままに名刺をわたしたところ、数日後に届いたのが一冊の本。タイトルは「浄土三部経の真実」で著者は坂東性純、その人だった。

東大でインド哲学を学び、大谷大学の教授を経て、上野の坂東報恩寺住職を務める。観無量寿経とは浄土三部経の一つである。

何ということをしてしまったのだろう。プロ

野球のファンがイチローに野球を教えたようなもので、まさに釈迦に説法。穴があったら入りたい。なければ掘って入りたい。

おかげで浄土三部経はじっくり読んだけど、どこまで理解をしたことか。



276文字の般若心経

次に手にとったのが般若心経。日本では最も短い経典として親しまれる。お馴染みの西遊記に記されている通り、玄奘三蔵が孫悟空らとともに、天竺から持ち帰った経典である。

般若心経は気の遠くなるような時空を超え、インドからチベット、アジアへと広大な地域に伝えられた。短いが故に、各地で様々な解釈がなされたが、どれをとっても教義の中心は「色即是空」。

色とは物質や概念を示すもので、人も山河も果実も全ては色。その色には一見形があるように見えるが、実は実体がないというのが教えの基本。つまりは空である。形あるものはすべからく変わり続ける。

日々の出来事とは、常に変化をする空の一場面に過ぎず、写真や絵画は、絶えず変化をする空の一瞬を切り取ることになる。ダヴィンチやラファエロは16世紀初頭の一瞬をキャンバスに留めて今に残す。

ただ、残念ながら色即是空と諸行無常の違いはよくわからない。

我が家の近くに gallery21yo-j という画廊があって、不定期ではあるけれど、度々一流の作家が選ばれて個展が開催される。この画廊に足を運ぶと、運がよければその作家さんに会うこともできる。

これまで何人か詳しい話を聞かせてもらったけど、それぞれの作品には何かしらテーマがあった。

ある人は風景画を展示したけど、そこには実体がないからという理由で、半透明の木が描かれていた。また、ある人は色即是空の反対をいって、できるだけ長い間、形を変えないものがテーマ。硬いコンクリートやアスファルトの絵がたくさん展示してあった。

どちらもその場の描写ではなく、世界が変わり続けることがテーマで、現代の芸術はうかうかすると何も見ないうちに通り過ぎてしまう。

そしてこの度は青木野枝さんの作品で、鉄の輪っかを溶接してできた巨大な作品は、画廊の中で組み立てる。テーマは諸行無常。作品は何かの結晶のような構造をもったもので、それは長い時間をかけて少しずつ動いている。



数メートルにおよぶ作品は鉄製

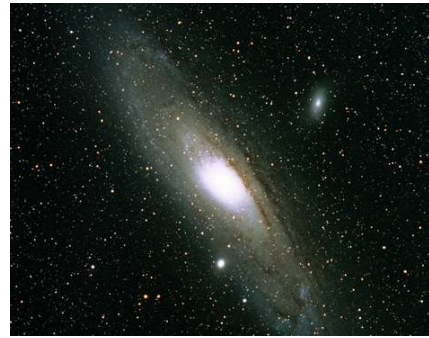
南極の氷河に流れがあるように、長い間の変化を表したものかもしれないが、もっと簡単に言えばこの作品は、画廊から撤去するときに分解をするので、すぐに形を変えると言っていた。

ただし、そんな簡単な話ではないはずから、私は体よく追っ払われただけかもしれない。

色即是空とは大昔から人間がもった大いなる智慧であった。そして現代では、お釈迦様のこの智慧に科学的な根拠が示された。

それは 137 億年も前に、何もないところから、ビッグバンによって誕生した宇宙に始まっ

た。当初は火の玉だった地球が冷えて、生物が誕生したのは 35 億年ほど昔。



初期の生命とはただ身体のコピーを繰り返すだけの単細胞だったけど、その時の地球の環境に適合したものが生き残って、そうでないものが消滅をした。

やがて環境に適した植物が栄えて、その植物が環境を変えて、動物が生まれた。そして人類が誕生したのは 200 万年前。

生き物はずいぶん進化をしたように見えるけれど、何かの目的をもって進化をしたわけではない。突然変異を中心とした変化を繰り返して、たまたま環境に適合した生物が、偶然に生き残っただけのこと。

これも色即是空。

このように科学はある姿を示してくれるが、あるべき姿を教えてくれる訳ではない。科学としての色即是空はここまで。空即是色は、科学の範疇を超えて、これはお釈迦様の掌にある。

リンゴの形、香り、味はやがて消滅する定めにあるけれど、消えてなくなる味や香りがリンゴそのもので、仏教ではこれを法と呼ぶ。

この法はリンゴの本当の在り方を示していて、実際目の前に現れるリンゴを相と呼ぶ。諸法実相の考え方で、これは伝教大師、比叡山延暦寺を建てた最澄の教えです。ただし、これも聞きかじりだから、この件に関して私に質問はしないでください。

人の場合、身体も心もやがて消滅する定めにあるけれど、形のない情報を DNA に残す。そして、この情報が新しい生命を作る。これが人の法。

こうしてできた新しい生命とは、本来情報に過ぎないが、実際には身体をまとして人の誕生。こうして、偶然に生まれた命ではあるが、よく生きようとする意志をもつ。

この意志の誕生とは、生命の誕生ほどに大きな重みをもつと思うのです。

本来の空即是色とは、意味が違うかもしれませんが、医者一人はこんな風に考えます。